

艦隊これくしょん - 艦これ -

鶴翼の絆

原作・監修：「艦これ」運営鎮守府
著：内田弘樹



ファンタジア文庫

2130

目次

第一章

わだつみの少女 | 5

第二章

試練の海 | 71

第三章

幸運の意味は(前) | 144

第四章

幸運の意味は(後) | 204

エピローグ | 277

あとがき | 286

第一章「わだつみの少女」

1

沖^{おき}ノ島^{しま}沖^{しほ}の洋上^{ようじやう}は、快晴^{かいせい}の一言^{いちごん}に尽^つきた。

水色^{みづいろ}の空^{そら}を背景^{きやうがい}に、巨大^{きよだい}な入道雲^{にゅうどうぐも}が水平線^{すいへいせん}から屹立^{きつりつ}している。海^{うみ}はどこまでも広く青く澄^すみ渡^{わた}り、涼^{すず}しげな一陣^{いちじん}の風^{かぜ}がその景色^{けいしき}を波音^{なみおと}でざわめかせ、そして、次の瞬間^{しゆんかん}――。

巨大^{きよだい}な爆発^{ばくはつ}と多数^{たすう}の水柱^{みづはしら}が、全て^ふを吹き飛ばした。

「シット！ 残存^{ざんそん}する敵^{しんか}深海棲艦^{しんかいせいかん}、いまだ五隻^{ごせき}！ 一航戦^{いっくわんせん}シスターズ、また慢心^{まんしん}して、同一目標^{どういびく}を集中攻撃^{しゆしゆくうげき}したんじゃないデスカー!?」

軽口^{けいこう}を叩^{たた}くように叫^{さけ}ぶ金剛^{こんどう}。飛沫^{しぶき}を迸^{ほとばし}らせながら、水上^{すいじやう}を三〇ノット以上の高速^{こうそく}で駆け
ている。

彼女の前後^{ぜんご}には、三人^{さんにん}の艦娘^{かんぬう}が続^{つづ}いている。

「残る敵艦、戦艦二、重巡一、駆逐艦二——！ 連中の頭は私たちが抑えるから、赤城と加賀は艦載機の第二次攻撃を急ぐデース！」

「言われなくても分かっています！ 今回の旗艦は私です。無駄口は不要——加賀!?」

「了解の。第二次攻撃隊準備開始」

金剛たちの背後では、赤城と加賀が停止し、艦載機の発艦を開始していた。天頂に何本もの弓矢を放つ——一瞬後、その弓矢がさらに多数に分裂、艦載機へと変化する。航空攻撃を成功させるには、まずは多数の艦載機を頭上に展開、空中集合の後に連携攻撃を仕掛ける必要があった。

と、金剛たちの前方に敵影が出現。クジラのように巨大な何かが猛スピードで水上を突撃してくる。

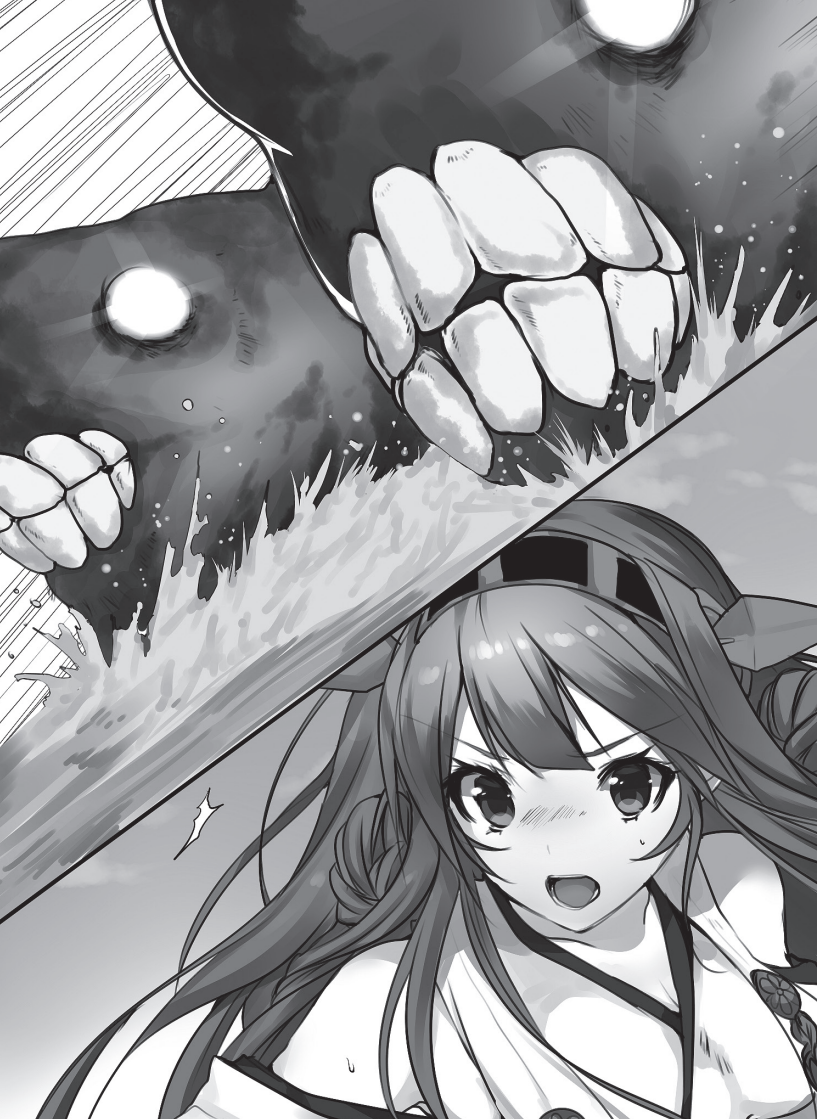
「……！ 前衛の駆逐艦二隻、おそらく口級ネ！」

「こちら赤城。響、雪風！ お願い！」

「了解。響、敵駆逐艦と交戦に移る」

「雪風、了解しました！ お任せください！」

赤城の声に応じるように、金剛の前方を進んでいたふたりの駆逐艦の艦娘——響と雪風が速力を上げる。響は無表情のまま、雪風は何かを確信するかのような自信を滲ませた表



情で進む。

「響さん！　まずは私が囨（おろ）になりますから、後方から射撃を！　私なら、回避（かい）が容易（い）なはずです！」

「了解——それと、響さんはやめて。私たちは同じ駆逐艦（くそくかん）のはず」

「響さんのほうが先輩（せんぱい）なんですから、それは出来ません！　とにかく、お願いしますね！」

「了解……ありがとう」

「やあああっ！」

肩（かた）にかけていた砲塔（ほうとう）を掴（つか）み、敵に向ける雪風——一瞬後、砲身（ほうしん）から何発もの砲弾（ほうだん）が放たれていく。

砲撃は一瞬にして二隻の敵駆逐艦に達した。周囲に多数の水柱（みづはしら）が並び立つ——しかし、敵駆逐艦二隻も突進しつつ巨大な口を開き、そこから砲撃を放つ。

「雪風は沈みませんっ！」

雪風はそれを飛び跳（は）ねるように回避しながら砲撃を繰り返す。時には自ら水柱に突入しながら——一度水柱が立った海面には、二度と敵弾は降（ふ）ってこないというジンクスに従った動きだった。

一方、響は敵駆逐艦の側面に移動していた。雪風が回避を続ける中、ある一点で停止、狙（ねら）いを定めるように敵駆逐艦を睥（にら）み、そして——。

「さて、やりますか……撃つ！」

爆発とともに砲身から吐き出される砲弾——直後、先頭の敵駆逐艦の側面に爆発が発生、胴体（どうたい）が粉碎（ぶんさい）される。黒煙（くろえん）を噴（ふ）き上げながら停止する敵駆逐艦。

生き残った敵駆逐艦は、雪風よりも響が脅威（きょうゐ）だと判断を改めたのか、強引（きやういん）な方向転換（てんかん）で響へと向かう。

「響さん……!？」

「雪風は撃破した駆逐艦にトドメを！」

「……ッ！　了解！」

もがきながら砲撃を続ける敵駆逐艦に射撃を浴びせる雪風。響も敵駆逐艦の突進をすんでのところで回避しながら、チャンスを探（さぐ）るように砲撃を続ける。

「私たちも、負けていられないネー！」

雪風と響の奮戦を横目で見ながら、金剛が凄（すこ）みのある微笑（ほほえ）みを浮かべる。

「霧島（きりしま）、私たちも一気に行くデース！」

「了解です、お姉様！」

金剛のすぐ後ろを駆けていた霧島が、眼鏡の奥の知的な瞳を金剛に向けながら答える。
霧島と金剛の前方の彼方には、彼女と同じ人間サイズのふたつの影があった。背の高い女性で、黒髪を風になびかせながら駆ける姿には美しささえ感じられる——両腕に保持しているのが、何基もの砲塔を備えた凶悪な形状の兵装でなければ。

「お姉様、距離、角度ともに十分——ここからなら、高い確率で直撃を期待出来ます！」

「了解、ファイア！」

「撃てえっ！」

海上で停止した後、背後の兵装の砲身を掲げ、砲撃を開始する二隻。駆逐艦のそれとは比べものにならないほどの大量の火炎と黒煙が生じる。

金剛と霧島は砲撃後、前進と停止しての砲撃を繰り返した。高速を発揮しながらの砲撃は照準を著しく困難とすからだった。

一方の敵戦艦二隻も砲撃を開始する。頭上に降り注ぐ砲撃については、自らの全面のヘクス型のバリア——「装甲」を展開、それを弾こうとする。バリアを展開するのは、金剛と霧島も同様だ。

お互いのバリアに次々と砲弾が着弾、爆発を繰り返していく。金剛と霧島のバリアは次第に傷ついていくが、敵戦艦のバリアは原形を保っている。

「くうっ、さすがに硬いネ……！」

靈力の消耗に耐えるように金剛が低い声で呟いた次の瞬間——金剛に爆発が発生する。

「お姉様……!?!」

巨大な黒煙に包まれる洋上——その先では、金剛が痛みにも歯を食いしばりながら膝をついていた。背後の兵装は——半ば崩壊、大破してしまっている。

それと同時に彼方から再び轟音。二隻の敵戦艦は、相変わらず健在で、砲撃を続けている。

「……ッ！ 赤城、加賀！ 早く！」

「分かっています！ 第二次攻撃隊、行けえ！」

空中集合を終えた艦載機群が、敵へと攻撃を実施。立ち並ぶ水柱——だが、数秒後に姿を現した二隻はともに打撃を被りながら健在だった。

「私と加賀の攻撃でも、沈められない……!?!」

「戦艦の防御力が、上がってきている……！」

啾然とする赤城と加賀——しかし、赤城は表情を引き締めると、すぐさま次の決断を下した。

「霧島、お願い！ このままでは貴方もやられる！ そうなれば私たちや駆逐艦たちも——

その前に一隻を！ もう一隻は私たちが！」

「了解！ まったくもう、私はこういうの、似合わないって言っているのに……！」

霧島は最大速力で敵戦艦一隻への突進を開始した。

「うおおおおおっ！」

至近に切り込みながら、霧島は砲撃を再開。距離が近いため、次々に着弾——バリアを破壊していく。しかし、それは敵戦艦も同じ。差し違え覚悟の攻撃だ。

先にバリアを貫いたのは霧島の射撃だった。バリア全体が崩壊し、爆発と同時に敵戦艦の姿がむき出しになる。

だが、一方の敵戦艦は、霧島に照準を合わせていた。主砲射撃の轟音が鳴り響き、弾道が霧島に向かう。回避しなければ、直撃と貫通は必至——。

「……ッ！ それが、どうしたああああ！」

霧島は背後の赤城と加賀が新たな攻撃隊を放ったのを横目で確認しつつ、全門斉射を放った。



数時間後、戦場となった海域から離脱しつつあった船舶内の執務室は、沈痛な空気の中

にあった。

「申し訳ありません、提督……」

傷だらけとなった六人の艦娘たち——その中でも旗艦の任を担った赤城が、悔しそうに頭を下げた。

「私たちが至らなかつたばかりに、今回の作戦も、断念せざるをえなくなつて……」

「氣を落とすな。まだ、チャンスはある」

提督と呼ばれた男——純白の第一種軍装をした青年が、報告書の束に視線を流しながら答えた。

「どうやらこの海域の深海棲艦は、他の海域とは段違いの強さのようだ。それが分かっただけでも収穫だ。上層部も、それを認めてくれるだろう」

「しかし、このままでは……！」

提督は赤城を片手で押さえた。

「まだ時間がある。その前に態勢を立て直し、総力戦でかかるべきだろう。お前たちの氣持ちは分かるが……今回は帰ろう。帰れば、また来られるのだから」

辛そうに頷く赤城。提督は空気を变えるように咳払いした。

「今回の戦いでは、敵戦艦の強化が目立ったのだったな、金剛？」

「ハイ、かなり硬くなっていたデース」

傷つきながらも明るい声を崩さずに金剛が答えた。

「私の砲撃もあまり通じなかった。あれは『あの戦争』での敵新鋭船艦を彷彿とさせたネ」
「」

「戦艦の強化は、私たちも感じました」

赤城が加賀と頷きあいながら後を受ける。

「航空攻撃が不振だったのも、そのせいだと思います。……私の慢心は、否定しません」

「そうか。ならば、艦隊強化のよいタイミングだ」

「艦隊強化？ よいタイミング？」

不思議そうな霧島。提督がにやりと答えた。

「我が鎮守府に、新たな正規空母が着任するんだ」

2

最初に視界にあったのは、いかにも古めかしい色合いの、木目の天井だった。

「え……」

少女は啞然としながら顔を何度も開閉させる。



「ここは……?」

そう呟き、まわりを見回す、自分の置かれている状態が次第に分かってくる。

自分は布団に寝かされていて、その布団は六畳ほどの狭い畳の部屋に敷かれていた。調度品は少なく、枕元には着替えの上着と下着が畳んでおいてある。

どう見ても、和風の旅館——それも、いささか古びた感じのある旅館の一室。

だが、少女にとっては、自分がそこに寝かされているという事実だけでなく、その状況自分を正しく認識していること自体が、信じがたいことだった。

「だって私、人間じゃなくて、軍艦として……空母瑞鶴として生まれたから、こんな場所、来たことも見たこともないはずで……」

少女——空母瑞鶴は腰から起き上がり、ふたつの開かれた掌を見つめた。

「どうして私、人間の女の子に……? そもそも私は、エンガノ岬沖で沈んだはずで……」返事はどこからもなく、あるのは静寂だけだ。

瑞鶴は自分を落ち着かせるように息を吐くと、改めて部屋を見回した。

やはり、何の変哲もない旅館の一室だ。ただ、心が落ち着いたおかげか、微かに寒さを感じる。窓から差し込む陽光も弱々しい——季節は冬らしい。

「いったい、どういうこと……?」

がたん? と、背後から物音が聞こえたのはそのときだった。瑞鶴は思わず振り返ってしまう。

「ひっ! ね、猫……?」

背後には一匹の猫がいた。黒と白のぶち猫で、どこからか忍び込んでいたらしい。

猫は瑞鶴に怯えず、何食わぬ顔で近づいてくる。

「工廠や艦内で、何度か見たな、猫……。まさか、私が猫に触れるなんて……」

懐かしい気分です頭を撫でてやろうと手を伸ばした瞬間、猫はその手を避けるように早足で駆け、枕の傍の着替えに近づき、そのひとつを咥えた。

「えっ、それって……」

どう見てもブラジャーだった。

そして、猫はそれを咥えたまま、脱兎のごとく、扉の隙間から逃げていった。

「えっ、その、えっ!」

困惑したまま胸元を見つめる——自分の今の恰好は浴衣だが、少なくとも上の下着は着けていない。

瑞鶴は青ざめた。あのブラジャーがなければ、自分はそれを着けないままとなってしまう。

「ま、待て！ この泥棒猫——」

瑞鶴は反射的に浴衣の帯をきつく巻き付け、全速力で猫を追ひ始めた。

扉を開けた途端、瑞鶴は長い廊下に躍り出た。廊下の両脇には、幾つもの引き戸が並んでいる。

（やっぱり、ここは旅館の中……？ でも、今はそんなことより……！）

猫は廊下を駆けていく。瑞鶴はそれを必死で追ひ掛けて——ひとりの少女とすれ違った。

「瑞鶴さん！ 目を覚ましたんですねー！」

すれ違いざまに元氣よく声をかける少女。瀟洒な制服を着ている。瑞鶴は思わず尋ねた。

「あ、貴方は……!?」

「駆逐艦の舞風です！ 第四駆逐隊の！」

瑞鶴ははっとした。第四駆逐隊はインド洋作戦や南太平洋海戦で、自分の属した機動部隊の護衛として活躍した駆逐隊だ。

「今度は回避運動じゃない本当の盆踊り、一緒にしましょうねー！」

対空戦闘時の回避運動を盆踊りと称するのは、瑞鶴や舞風が体験した戦争での通例だった。

「わー楽しみ！ って、貴方がいるってことは、私以外にも軍艦が人間にっ!?」

「『この世界』では『艦娘』、って呼ばれていますよ——！」

（艦娘!? 私、やっぱり人間みたいなものになっちゃったってこと……!?）

猫は廊下を駆け抜け、ロビーに向かった。

今度は洗濯物を何枚も抱えた少女——やはり、舞風と同じように、洒落た洋服を着ている——の足下をすり抜ける。

「あらあら、股の下を潜るなんて大胆さんねー」

「が、外国人さん!? っていうか胸でかつー！」

新たに出会った少女は美しい金髪をなびかせていた。洋服の下には豊満な身体がある。

「私は重巡愛宕。初めまして。そしてお久しぶり。艦娘が大和撫子とは限らないのよ」

「そ、そうなんですか!?」

記憶はあいまいだが、確か愛宕は第三次ソロモン海戦やマリアナ沖海戦などに参加した、歴戦の重巡洋艦であるはずだ。重武装ながらバランスの取れた設計で——それが今の姿にも反映されているのかもしれない。

「ちなみに今の猫は抜猫って名前。この鎮守府の次席指揮官なの。以後よろしくね」

「抜猫!? 抜猫じゃなくて!? あと、旅館なのに鎮守府って、どういうこと……!?」

「ここは旅館を再利用した鎮守府なの。覚えておくと便利よ。ふふっ♪」

「あ、ありがとうございます！」

猫に続いて、愛宕の隣を勢いよく駆け抜けていく瑞鶴。猫との距離はいまだ埋まらない。ロビーを抜けた抜猫が次に飛び込んだ場所は厨房だった。やはり、艦娘と思しき数名の少女たちが、台所の近くで、白い割烹着を着て調理している。

（調理場にも艦娘!? どうなっているの!?)

「はい、天龍ちゃん。朝ご飯の一品目、出来たわよ。試食してみて」

「おう! ……もぐもぐ。さすが龍田の龍田揚げは美味いな!」

「そりゃ、私が発祥だつていう説があるくらいだから、練習しておかないと、と思つて」

「おかげでオレも美味い龍田の料理が食えて満足……つて、おわつ、猫!」

「あらら、抜猫ちゃんじゃない」

抜猫はふたりの少女の傍をすり抜けていく。龍田揚げには見向きもしない。

「あらら、抜猫ちゃんは龍田揚げよりもブラが好き? よっぽど良い匂いがするのかしら」

「わー! すみません、すみません!」

顔を真っ赤にしながら厨房に駆け込む瑞鶴。ふたりの傍をすり抜けた直後、背中から声がかかる。

「おう、新人りだな! オレの名は天龍で、こっちは龍田。以後、よろしくな!」

記憶が正しければ、天龍型軽巡洋艦の一番艦と二番艦で、共に輸送任務で活躍したはずだった。

「よろしくです! でも、どうしてここに貴方たちが……?」

「この鎮守府は、私たち艦娘たちで運営されているの。食事もみんなが交代で調理しているのよ」

「な、なるほど……!」

「あと、その先には、提督の執務室が……」

「は、話の続きは後で——」

瑞鶴は抜猫を追って調理場を抜け、再び廊下に出た。その先には、洋風の重たげな扉が続いている。

（何、ここ……!?)

「瑞、鶴……!」

初めて聞く——しかし、親しさと懐かしさに溢れた声。瑞鶴ははっと前方を——抜猫が

駆けていく廊下のさらに先を見つめた。

自分と同じような背格好の艦娘と思われる少女が、純白の第一種軍装をした青年に寄り添いながら、驚いたようにこちらを見つめていた。

長い銀髪に赤いカチューシャ。白の胴着と赤いスカート。ブラウンの瞳。そして、胸当ての「シ」の文字——次の瞬間、瑞鶴はその少女の名を口にしていた。

「まさか、翔鶴姉……！」

「お、おい……！」

慌てたような青年の声。気がつくまで瑞鶴は、男性と正面衝突コースを走っていた。抜猫はすでにふたりの背後にまわっている。

「ど、どいてええええ！」

慌てて足を止めようとする瑞鶴——だが、その拍子に足がもつれ、前のめりに転んでしまう。

一瞬後、瑞鶴は男性に抱きつくように激突した。男性も瑞鶴とともに背中から倒れ込んでしまう。

「あいたたた……だ、大丈夫!？」

「あ、ああ……」

苦しげに答える青年。瑞鶴は慌てて身を起こそうとして——凍り付いた。

衝突の衝撃で浴衣がはだけたためか、青年の右腕が、瑞鶴の左の胸にジャストフィットしていた。

凍り付いたままの瑞鶴。一方の青年は自分と瑞鶴の状況を確認すると、意地悪げな微笑みを浮かべた。

「見た目は大きくないが、掴み心地は、意外と悪くなさそうだな……」

「——ッ！」

瑞鶴が赤面しながら声にならない声を上げる——その瞬間、瑞鶴の恰好も翔鶴のそれとほぼ同じになり、そして、頭上には多数の艦載機が出現し——。

「駄目よ瑞鶴！ 気持ちを高ぶらせては……！」

「いやああああああ！」

「おい、ちょ、待……！」

瑞鶴の絶叫とともに、艦載機の群れは一気呵成に青年へと急降下攻撃を開始していった。

3

結局、抜猫はその扱いに慣れた駆逐艦たちによって御用となった。



「あいててて……」

「大丈夫ですか、提督……？」

目の前には、なんともいえない光景があった。

よく整った執務室で、自分が放ったと思われる攻撃で傷だらけとなった提督と、彼に心配そうな視線を向けながら絆創膏を貼^はっていく翔鶴。

姉である翔鶴が、自分と同じように艦娘となってくれていたことは嬉しい。しかし、だからといって、頭の中の混乱が収まったわけではない。

艦娘とは何者なのか。鎮守府に艦娘は何人いるのか。今はいつの時代で、ここはどこなのか。何故、目の前の青年が提督と呼ばれているのか。

提督を攻撃した時に出現した装備はいつのまにか消えている。どうやらあれが、艦娘としての特別な能力らしい。

（だとしても、私、悪くないもん……）

微妙な居心地の悪さを覚えながら、瑞鶴はひとり唇をとがらせていた。

（その、うっかりミスは誰にでもあるとして……言うに事欠いて、意外と、だなんて！）

事務機の椅子に座りながら、全ての傷に絆創膏が貼られた後、提督は翔鶴と目を合わせた。

「ありがとう翔鶴。もう大丈夫だ」

「本当ですか？ どこか痛むところはありますか？」

なおも心配そうに尋ねる翔鶴。第一印象だが、翔鶴は自分の姉らしく——というか、自分とは正反対らしく、とことん優しい性格のようだった。

「ああ。それよりも、君とのスキンシップを楽しみたいな。こうやって……」

さりげなく翔鶴の襟に手を伸ばそうとする提督——目を剝いた瑞鶴が立ち上がりかける前に、翔鶴が慌てて押しとどめる。

「だ、駄目です……！ 今はまだ秘書として勤務中ですし、それに、目の前には妹がいますし……」

「じゃあ、勤務が終わったらいんだな!? ふたりきりならなおいいんだな!? そうだな!？」

「そ、それも駄目です!」

「げっふん、げっふん!」

瑞鶴はあからさまに咳払いしてみせた。どうやら、提督についての第一印象は正しかっ

たらしい——秘書に手を出す、完全なセクハラ男だ。

我に返った翔鶴と提督はばつの悪い表情を浮かべた後、同じように軽く咳払いをした。

「まあ、それは小粋なジョークとして……」

提督は苦笑とともに瑞鶴に水を向けた。

「君の妹と話そうじゃないか。間違いない、この状況に困惑しているだろうし」

瑞鶴は、探るような声で答えた。

「まあ、その、困惑していることは確かですが……」

「じゃあ、まずは自己紹介からだ」

提督は瑞鶴に右手を差し出した。先程とは異なる真摯な声——本気で態度を改めたらしい。

「俺は、提督だ。本名は別にあるが、ここではみんなにそう呼ばれている。この鎮守府の主であり、君たちの預かり主——指揮官でもある」

「瑞鶴です。正規空母をやっていた、はずです……」

言葉を濁すように答えながら手を取る瑞鶴。自分の記憶に間違いはないはずだが、これが現実とは思えない以上、その正しさにも疑問符が付いてしまう。

提督は全てを察しているように頷いた。

「安心しろ。君は確かに正規空母瑞鶴だ。それに、その反応を見る限りだと、『あの戦争』のことも、自分の最期も覚えているということだな？」

「ええ、大体は……」

「あの戦争」。瑞鶴はその言葉に引っかけかりを覚えていた。今が「あの戦争」の後の世なら、そんな、奥歯にモノが挟まったような言い方はしないはずだ。

瑞鶴の違和感を察したのか、翔鶴が決意を促すように頷いてみせた。提督も応じるように頷く。

「では、単刀直入に話をう」

提督は真正面から向き合った。

「君たち艦娘は、『あの戦争』で活躍した軍艦のもうひとつの姿——といわれている」
もうひとつの姿——提督の言わんとすることを察し、僅かにショックを受ける。自分は艦娘として、第二の人生を歩むことになってしまったのだ。

しかし、疑問はまだ尽きない。

「いわれている……って、あやふやな言い方ですね」

「仕方あるまい。俺たちは君たちや、君たちの過去について、詳しいことはあまり知らないんだ——翔鶴？」

「はい。瑞鶴、これを見てくれない?」

翔鶴は机の上に置かれていた地図を渡した。

「これは……!」

瑞鶴は息を呑んだ。

地図に記されているのは、見たことのない地名ばかりだった。「横須賀」や「舞鶴」などの地名はあるものの、半分以上は初耳の地名だ。

「『バシー島』や『カレー洋』、それに『沖ノ島』……どうということ……!」

瑞鶴の理解を待って、提督が続けた。

「そういうことだ。つまり、俺たちにとって君たちが戦い、沈んでいった戦争は、俺たちにとっては『あの戦争』としか言いようがない——俺自身、君たちから聞いた話でしか、概要は知らないからね」

「じゃあ、ここで『あの戦争』のような事は……」

「起きていない、と言っておこうか。ただ、君たちの話から察するに、おそらくここは君たちの生きた時代と、いろいろ技術進歩の点で差違が生じているようだ」

「……………」

「心配するな。君たちの祖国とこの国の間に文化的な相違点はほとんどない。ギャップを

感じることはあるだろうが、直に慣れる」

「そう、なんですか……」

瑞鶴は無意識のうちに拳を固めてしまっていた。ここが、仲間とともに命を懸けて守ろうとした祖国ではない、そのことに少なからず衝撃を感じている。

それに、もうひとつの、根本的な疑問もあった。

「では、私達はどうして、ここに……」

瑞鶴は躊躇いがちに尋ねた。

提督は黙って席を立つと、窓枠の前で止まった。

「この世界は、滅びの危機に瀕している」

「滅びの危機……?」

「翔鶴」

「はい」

翔鶴は手元のリモコンを操作して、壁に掛けられたテレビの画面を付けた。

映し出されたのは、瑞鶴にとって衝撃的であり、同時にある意味で、馴染みの深い光景だった。

黒煙を噴きながら燃えさかる何隻もの水上艦艇。海面には何人もの溺者がオイル塗れで

浮いている。艦艇の多くは輸送船やタンカーだが、中には駆逐艦や巡洋艦、果ては巨大な空母までもが交じっている。

しかし、本当に瑞鶴の目を奪ったのは、そうした惨劇の情景ではなかった。撃破された多数の艦艇——その周囲を、巨大な鯨のような何かが泳ぎ回り、海面の溺者を捕食している。生き残った駆逐艦や巡洋艦は砲撃で必死に反撃するが、まったく通じない。

それだけではない。その後方には、水面に浮く、人影のようなものまで捉えられている。まるで、艦と、それを操っていた人々の怨念が、かたちをもってしまったような——。

「これ、は……」

「深海棲艦。我々、人類の天敵だ」

啞然とする瑞鶴に、提督が静かに声をかける。

「深海棲艦の正体については、いまだ不明な点が多い。ただ、連中が我々に敵対し、海洋を支配する意思を持っていることだけは確かだ。そして我々人類は、連中にされるがままとなっている」

「されるがままって……まさか……!」

絶句する瑞鶴に、提督は静かに頷く。

「現在、この星のほぼ全ての海が、彼らの跳梁の場となっている。海上交通網——シーレーンは破壊され、各国は鎖国同然の状態となっている。もちろん、島嶼国家であり、貿易国家である我が国にとっても致命的な状況といえる」

瑞鶴は頷くことさえ出来なかった。自分の祖国もまた、貿易国家——国内資源の少なさ故に、海外から物資を輸入し、製品を輸出しなければ生きていけない国家だったからだ。

「あの戦争」も、その事実と無関係ではない。

「でも、航空機を使用すれば、輸送はなんとか……」

「航空機ではパイロードが小さすぎる。それに、深海棲艦には君と同じような空母クラスのものもある。当初は我々もそれを試したが、彼らの艦載機に輸送機を次々に落とされて、断念することになった……」

「……………」

「各国は今も深海棲艦との戦いを続けている。だが、彼らの力は強大であり、我々だけの力では、沿岸部の警備だけで精一杯だ。そしてその沿岸部とて、彼らの揚陸部隊の襲撃を完全に防ぎきれない」

瑞鶴が見つめるテレビの映像は、その沿岸部の光景に切り替わっていた。多数の廃墟が並んだそこには、敵の輸送船らしき残骸が幾つも転がっている。

瑞鶴は再び息を吞んでいた。深海棲艦の攻勢は、人類の支配領域である地上にまで及んでいるのだ。

「君たちは、深海棲艦と戦うために生み出された——俺はそう聞いている。君たちにその力が備わっていることは、先程、君自身が証明したとおりだ」

瑞鶴は無意識に自分の拳を見つめた。気持ちの高まりとともに出現した武具と艦載機——あれが、空母クラスの艦娘としての自分の力なのだろう。他の艦娘たちも、固有の能力を持っているに違いない。

「そして、俺は君たちを指揮して、深海棲艦を撃滅し、この世界に平和な海を取り戻さなければならぬ」

「じゃあ、他の艦娘たちは、すでに……」

「ああ。すでに実戦を経験している。戦いの中で、失われていった艦娘たちも少なくない……」

瑞鶴は言葉にならない感情を覚えていた。

「あの戦争」は無残な様相となったが、「この世界」の戦争は継続中で、自分たちはその切り札なのだ。

「あの戦争」で、私たちは、いろいろなものを守ることが出来なかった……」

思い出されるいくつもの凄惨な情景。自分はそれを、いつも見ていることしか出来なかった。仲間と痛みを分かち合うことも出来ないまま……。

（でも、「この世界」でなら、もう一度、それをやりなおせる……?）

「この旅館は、君たちの日常生活のために上層部が借りた、君たちのための鎮守府だ」どこか誇らしげに提督は続けた。

「といっても、中身は旅館のままだが営業まではさすがにしていないがな。無論、君たちの本格的な整備は専用の工廠で行ってもらっている」

「それなら、最初からその工廠に住まえば……」

軍艦、つまりは兵器であるなら、そうするのが当然——しかし提督は苦笑しながら答えた。

「現在、鎮守府に集う艦娘の数は一〇〇名以上。さすがにこれだけの大所帯をまとめるには、軍港といえどもいかにも手狭だ」

「ひゃ、一〇〇名以上……!?」

「あの戦争」で戦った艦艇数を考えれば少ないといえるかもしれないが、それでも驚きを感じてしまう。

「それに、俺は君たちをただの軍艦として——ましてや、戦争の道具として扱っつもりは

ない」

それが信念であるかのように力強く答える提督。

「君たちは軍艦でも人間でもない『艦娘』だ。そして俺は君たちを死地に送り出さなければならぬ。なればこそ、君たちには出撃するその時まで、普通に平和な暮らしを送ってもらいたい」

瑞鶴はあつげに取られていた。目の前の提督は、先程までのセクハラ魔と同一人物とは思えない。

「そこでだ。まずは君に、選択してもらいたい」

「選択……？」

「俺は、戦いを望まない艦娘にまで、この星の命運を背負わせようとは思わない。この戦争は、本来なら君たちには関係の無い戦いのだから」

いくらか寂しげに、提督は付け足した。

「しかし、それでも俺たちは君たちを頼らざるを得ない。ならばせめて、我々のために戦ってくれるか否か選択だけはしてほしい」

「……………」

「艦娘たちの中には、前線に出ず、後方支援に徹しているものもある。しかし、今の俺た

ちにとって彼女たちではなくてはならない存在だ。戦争は、前線だけで行うものではない」

提督の言い分はもともとだった。戦争は前線だけで行うものではない☒☒自分も「あの戦争」の大半を、前線ではなく後方で母艦航空隊の錬成任務に費やしたという記憶がある。

（でも、他の艦娘たちは再び戦場に立っている……）

今朝出会った艦娘たちも、その例外ではないはずだ。そして、目の前の姉の翔鶴も。

（そんな中、自分だけ戦わないなんて……！）

「いいえ、提督さん」

瑞鶴は凜とした口調で答えた。

「私も、深海棲艦と戦います。私は、『あの戦争』で真正銘の主力空母だったんだから……！」

「瑞鶴……」

感情を堪えた翔鶴の呟き。提督は大きく頷く。

「分かった。だが、現時点では、それが君の意思ということだけ受け取っておこう」

「現時点では……？」

「今日から二週間、君を通常の艦娘として扱う」

提督は右手の人差し指と中指を立ててみせた。
「その後、もう一度、結論を聞かせてほしい」

つづきは2月20日発売のファンタジア文庫で！

© DMM.com / KADOKAWA GAMES All Rights Reserved. 2014

©Hiroki Uchida, Mataro 2014